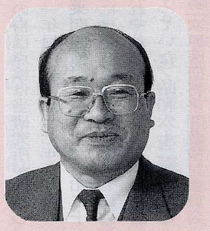
都市と市民と大学②

【地方都市における大学】

広島大学長
原田康夫



前回は、大学の起源と、文明・文化と大学という主題が、パビア大学での留学の経験を交え語られた。
今回はイタリアの学園生活と、地方都市における大学、特に統合移転完了後の学園都市の在り方について話が展開される。

学寮カレッジ・コレッジョ

ボローニヤでもパリでも学問の徒が最初に確保しなければならないのは宿舎でした。

大学発祥の初期には、各地より集まった仲間同士が一軒の家を借りて家具を用意して、合宿したようです。これを「ホスピキウム」、「ホール」などといっていました。

その他に下宿もあったようで、賄付きの部屋ではパンは上等であること、ワインも上質であること、夕食には肉をつけることなどという取り決めもあったようです。また、家賃の取り決めもあり、法外に高くつりあげられる時には、上からの監視体制も早くからあったようです。

日本においても、かつて私達は一間を借りて共同のトイレ・風呂を使いながら勉強したものですが、最近は大抵の学生が一部屋ずつ独立したもので、いわゆるマンション、アパート形式で生活するようになりました。

ヨーロッパでは、少し進んでいまして、私がこの学寮、コレッジョに入っていましたので、少しコレッジョの機構についてお話しましょう。

学生用の宿舎をコレギウム（カレッジ・学寮）といいます。先程申しましたホスピキウム・合宿に代って立派な寮ができたのが、ヨーロッパでは四～五百年前のことです。私は、コレッジョの中でも大変有名なコレッジョ・ボロメオに入ることができました。

このコレッジョは、七十八人の学生または留学生が入ることができる寮で、枢機卿のボロメオが一五六一年に造ったもので、現在もびくともしないで使われているのです。中には、大講堂・チャペル・音楽室・図書室・食堂・遊戯室があり、あたかもお城の中に住んでいるようでした。また、庭ではサッカーができるグランドがあり、広大な庭園もあり、これ一つで大学として機能したのかも知れません。このように中世の学寮は、司教・枢機卿という大立者、国王や領主、大商人などがパトロンとなってできたようです。

ここに入れる学生は、いわゆる特待生で、奨学生です。私もわずか二百ドルしか持出しのできない昭和四十年に、ここに入れてもらいどうにか寝ぐらと食事が保証されましたので、一年余りパビアで過ごすことができたのであります。

このような有名な寮が、パビアにはもう一つあり、リズリエーリの男子寮・女子寮です。更に、近代的な寮なども

マトリクラ最後の日の先輩によるしごき

あり、全部で十四のコレッジョがありました。私の居たボロメオは、卒業しても一年間希望すれば滞在が許可されるようになっていて、その資格は、成績が抜群でなければならないということで、学生はよく勉強していました。

このようなコレッジョには、パリのナジャール・ソルボンヌ、モンテーギュ、ハイデルベルグのディオニシアヌム、オクスフォードのクィーンズ、オール・ソールズ・ケンブリッジのキングスなど、有名なものがたくさんあります。

ちなみに一番大切な食事は、朝は簡単でコーヒー、または紅茶にビスケット・パンだけですが、お昼と夜は全員食堂に集まり、自分の席も決っており、ナプキンも各自備え付けで、前菜・メインディッシュ・サラダ・チーズと果物の四皿とブドウ酒のフラスコが出るわけで日本の学寮などとは根本的に異っています。夏でも、上着は着用で、私があまり暑いので上着をつけずに自分の席に着きましたところ、皆からジャッカと怒鳴られたのを今でも思い出します。

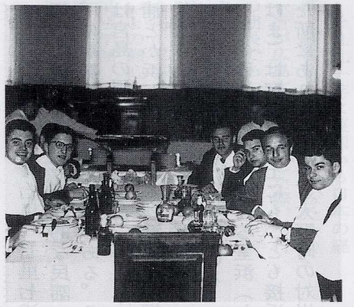
このように紳士の集団として生活をするのですが、一年生はマトリクラと呼ばれ三ケ月間は首にナプキンを巻いて、食堂の真中に席を作ってもらい食事をします。食事の間、上級生のお世話をしなければならず、その他靴を磨いたり、タバコを買いに行かされたり、大変です。

マトリクラの最後の日には、寮をあげての祭で、上級生から大変な目にあいます。その儀式が済むと川淵の居酒屋へ全員で出かけて大酒を飲み、歌い、これでマトリクラ最後の夜となり、大騒ぎをいたします。そして、翌日からは全く紳士として対等に扱われるようになります。これも長い間にできあがった伝統と思われ、ちょうどこういう儀式に遭遇した私にとって、今でも忘れ得ぬ第二の学生生活として、懐しく思われます。

市民と学生と教師

イタリアの学生は、このように上級生から紳士の嗜みを仕込まれるので、町中に出ても評判が良いのです。日本でもかつては、このようであったのですが、今日では学生の社会に対する責任を問う場がなく、我が大学でもチューター制度はありますが、学生のプライベートな生活には立入ってはいません。

古い大学町パビアでは、大きな産業もなく観光資源はチェルトーザ・ディ・パビアという中世の修道院くらいでして、町の収入源は専ら学生かも知れません。それだけに市民は、学生を大切にしており、また学生も市民との間にトラブルは起こさないように気をつけているようです。



パビア大学のコレッジオ・ボロメオの食堂風景
マトリクラ（新入生）は首にナプキンをまく

人々は、教師をプロフェッソーレと呼んで尊敬し、大変親しみを持っています。大学を卒業した人達はすべてドットーレと呼ばれています。

学生もお茶を飲みに出るのはバーであり、ここではエスプレッソ・コーヒーを立ち飲みし、挨拶をしたり立話をする場になっています。

地方都市における大学

前にお話しましたように、その昔ヨーロッパの大学が移動・移転するのは、建物を持たない時代にはよくあったことです。これには市民との対立や政治的な問題もあったわけです。しかし、近年になって日本では、都市の中における大学は、キャンパスの手狭さや統合ということなどで、より有機的に教育・研究をするために、土地が安くて、広いキャンパスを求めて郊外に出る例が多くなりました。

東広島市は、田園地帯で酒造りの町が、突然学園都市ということになり、併せて広島市の膨脹に伴い、広島市のベッドタウンとしての機能も持つようになりました。

この十万人足らずの町に、一万数千人の学生・教職員が集まって来て、新たな市民として加わってきたのですから、町そのものにも大きな戸惑いがあると思います。

かつて大学の始まったころのヨーロッパでは、都市の人口はパリで二万五千人から五万人、ドイツ最大のケルンが三万人、イタリアのベネツィア、フィレンツェが十万人前後（十四・五世紀）、ロンドンが三万人から四万人を擁したに過ぎませんでした。一般にその当時の都市の人口は、数千から一万に過ぎなかったのですが、その小さな狭い町の中から大学は発祥し、今日のように町と共に大きくなって来たのです。

都市では市民が主人公で、すべての物、多くの人、さまざまな情報が行き交うのが都市であります。都市では市民が幸せで、健かで、良い環境で文化的に暮すのが理想であります。この東広島市の市民の生活が、突然の人口増、特に若者の増加で、静かな田園町がある意味で、かき混ぜられはしないかという思いが今、東広島市民の胸の内にあるのではないかと思います。

実際には、来年で市制二十年になるこの町では今、市民と市行政との間に意見の交換会が開かれているようで、新聞の範囲では、その要望にも小学校区の見直しはいかがか、農道の復旧などという比較的小さな問題しか提示されていないようで、大学との関係とか、大学に関する要望もいまだ見あたりません。

このことを見ましても、大学移転と連動してテクノポリス、国際学術研究都市、臨空都市と大きな冠をつけられても、その意味がまだ市民の皆さんの実感として持たれていないようであります。

広島大学は、平成七年三月には統合移転が完了する予定ですが、市民の皆さんは大学を自分たちのものと思い、これを大いに活用していただきたいと思います。

大学は、その存在する地方都市だけでなく、我が国の未来の文化・学術の振興や、社会経済を発展させ、支えてゆく最も大きな役割を持つ集団であります。これから、何世紀にもわたってこの東広島市の文化・教育・経済にどれ程大きな影響を与えてゆくか、この地域に与える効果は計り知れないものがあります。しかも広島大学は、日本で一番規模の大きい大学になりました。

この東広島市におきましても、都市計画の面から、都市の再編成も当然考えられなければならないと思います。二十一世紀を目前にして、この東広島市も交通システム、ビジネス街、ダウンタウン、学生街、公園、多目的ホール、病院といった、文化的・教育的環境の整った都市に成長していき、市民はその恩恵を被る生活をしなければなりません。

また、大学の中で一番多い学生と市民との交流、教職員を市民として受け入れるなど、田園都市から近代都市へと発展するべきであり、広島大学も開かれた大学として、その機能をフルに発揮し、共存共栄してはじめて、地域における大学の意義があるものと思われるのであります。

（はらだ・やすお）

＊　＊　＊　＊

〔参考文献〕
一、H・ラシュドール（横尾壮英　訳）「大学の起源」東洋館出版社
二、横尾壮英「ヨーロッパ大学都市への旅」リクルート出版部